屠竜物語

Dragon Slayer's Story

Ⅳ

過去との邂逅

R18
ADULT ONLY

1

『皆聞こえるか?やっと見えて来た。あれが噂のルシナガの滝だ』

『ファヴル三滝』の一つとして名高い『ルシナガの滝』が進行方向右側に見えてきたのは、ウィンヘルムを出発して四日目の昼頃であった。

運転している黒人の大男、フーバーがマイク越しに伝えるとリフィーとガンブは窓に飛び付き、ジグと金髪の女性、エイミアもその後ろから窓の外を見る。

それまで続いていた無機質な高速道路と広大な大地や大裂崖のコントラストはやっと消え去り、轟音と共に大量の海水を大裂崖の底に流し落とす光景は一層迫力に満ちて近付いて来る。

「すごーい!!パパみてみてー、すごくおっきいー!!」

「おーデケー。あんだけデカけりゃ竜でもソッコー墜落すっかもな」

「流石に壮観だな。ファヴル三滝の中でも最大規模と言われるだけあるな。リフィー、ガンブ、二人共運転中だから窓は開けるなよ」

「はーい」

「おーっす」

短く刈られた銀髪と眼鏡が似合うジグの声に、素直に返事をする銀髪の幼い少女と黒髪髭面の大男。

横で見ていたエイミアが興味深そうにその様子を観察している。

「まるで二人の子供と父親ね」

「……そりゃどうも。本当は愛娘とボディガードなんだがな。ボディガードが扱い難くて困る」

「誰が扱い難いんだよ。それによぉ、ぶっちゃけると俺はボディガード兼セフェ」

視線を変えないまま素早い拳でガンブの脳天を叩き潰し、都合の悪い発言を遮る。エイミアが不思議そうに表情をしかめるが、最早見慣れた光景になってしまい深くは追及しない。

頭を抱えて窓から下がるガンブの代わりにジグがリフィーの隣に割り込む。天真爛漫な笑顔ではしゃぐ様子に、拳の痛みもすぐに忘れる。

「……扱いには長けてそうだけど」

エイミアが一人呟いた直後、高速道路は大きく右に進路を変えて更にルシナガの滝に近付く。大裂崖の絶壁に沿って走行するようになると、滝の桁違いな規模が更に現実味を帯びる。

縦横に長く厚い水の壁は近付いても底は見えず、太陽の光さえ届かない崖下へと消えていく。大量の水飛沫が上空へ巻き上がり、風に乗り渦を描きながら拡散して窓ガラスに水滴を散らす。

海風に乗る水飛沫は大裂崖の上空を覆うように流れ、崖下から噴き上がる冷たい空気によって冷やされ大量の濃い霧となって広がる。

霧は更に風に乗って大陸中央に向かうか、崖の中を隠すように底へ沈みながら漂い続ける。風向きによっては大陸の南北にも吹き込み、滝に近付けば自然と視界は薄らと霞み車窓に水の膜が張る。

大裂崖を隔てた北部の中央ファヴルの大地はその中に隠れてしまい、殆ど視認する事は出来ない。勿論、北部から見た南ファヴルも同じような状況になっているのだろう。

だが、周囲を雲に囲まれた浮世離れな構図は中々幻想的であり、駄目押しに水飛沫のスクリーンが虹を映し出せば、そこはジグが創作した小説のようなファンタジー世界が見い出せる。

「にじ！にじ！にじがでてる！ほらあそこ！たきのすこしこっちがわ!!」

「おうパパも見えるぞ。ちっと視界は悪いが、十分良い景色になってるな。この辺りは天気が変わりやすいと聞いてたが、この分だと問題無く渡れそうだな」

「わたる!?あのにじわたれるの!?」

リフィーがジャンプをして更にはしゃぎ出す。キラキラした大きな瞳をジグに向けて、嬉しそうにジグの服を引っ張る。

「ハハハ、流石にこんな大きな車じゃ虹は渡れないな。もうちょっと先に進むと……ほら、見えて来た」
ジグがリフィーと同じ目線まで腰を下ろし、滝の上流にあたる海域を指差した。
霧の中から現れたのは、巨大な橋だった。海域の南側から北側に向けて伸びており、その終点は霧の中に隠れて見えない。
橋の形状はアーチ形であるが、アーチの高さは尋常では無い。橋の手前からゆっくりと高さを増していき、橋桁に到着する頃には滝や崖が遥か眼下に見下ろす格好になる程高い。
勿論、橋桁の間に柱は一切なく、両岸の強固な基礎部分で頑丈に建設された支柱で横から挟み込むように橋桁を支えている。
小規模な石造りの端や水道橋などではよく見られる形状ではあるが、鉄筋コンクリート製、尚且つ真下で世界最大級の滝が落ちるような広い海域の間を通る橋では前代未聞だろう。
「あの橋を渡って中央ファヴルに行くんだ。これから少しずつ坂を登って橋の上に登って、向こう側に着いたらまた少しずつ坂を下るんだ」
「へー……。あのはしもおおきいね。でもへんなかたちー。ねえねえ、なんであんなかたちになってるの？ひもみたいなのぜんぜんないよ？」
「紐みたいなの……？」
ジグは一瞬考えを巡らせると、すぐに見当が付いた。
「あぁ、もしかして吊り橋の事か。確かに普通は吊り橋が多いけど、ここじゃ吊り橋は作れないんだよ」
「えー、どうして？」
「滝が地面を削っちゃうんだ。両岸はコンクリートとかで守る事も出来るけど、川底はそうもいかない。だからいつかは川がなくなってしまう」
「かわがなくなっちゃうの？こんなにおっきいのに？」
「そう。もし吊り橋のように川の中に柱を立たせると川と一緒に滝の下に流されてしまう。だから多少苦労しても柱の無い形状にしたんだ」

「ふーん……」
「あの、ちょっと良いかしら？」
二人の間に割り込む様にエイミアが言葉を掛ける。若干困惑したような表情で、助けを求める視線をジグに向けている。
「……ん、何か？」
「あなたの連れの……ガンブさんがまたウチの『お荷物』で遊んでるみたいなの。私が行っても言うこと聞いてくれないし……。悪いけど、またお願いできる？」
ジグは溜息をついて心底嫌そうに立ち上がり、リフィーに大人しく待っている様に告げる。
「やれやれ、またか。ったく、アイツはどんだけフリーダムなんだか。こっちの身にもなって欲しいわ」
「あら、でも彼の相手をしている時の貴方、結構満更でもないと思うけど。『相棒』としては中々だと思うわよ」
「……うん、まぁ、『相棒』だな……うん、相棒だけで納めるべきだったのかも知れないな」
エイミアには、少なくともジグの口からはガンブとの『雄同士の関係』については伝えていない。一時的な仲間としても、そんなディープな関係性まで伝える義務も義理も無い。
「え、何か言った？」
「いや、何でもない。……分かってると思うが」
返事代わりに鋭い睨みを利かす。リフィーからは見えない角度でエイミアの整った顔を凝視し、敵意までとはいかないまでも不信感を伴った感情を向ける。
「心配しないで。今は娘さんをどうこうする気はないから」
薄ら笑顔を浮かべながら、エイミアは居住スペースの後部にある個室に親指を向けて対応を促す。
『今は』という言葉に警戒し、暫くは手を出さないという意思表示に一応は納得しつつ、リフィーの傍を離れて入れ違いにキャンピングカーの後部座席に向かう。
後部座席と言ってもスライド扉で仕切られた部屋になっており、大人一人が寝れる程度のスペースは確保されておる。扉の脇にはロフトに昇るための梯子が設置され

ており、下手なアパートの室内よりも充実した居住空間と化している。
「ガンブいるか？」
ノックもせずいきなり扉をスライドさせると、中からはエンジン音にも負けない二人の大声が響いて来た。
「やっ止めろ！変態！淫乱！ホモ野郎!! おっ俺はそういう趣味無ぇんだよ!!」
「えー、竜の時はその変態野郎にチンポ踏まれて射精してたのに興味ないって事は無いだろ？なな、良いだろ良いだろ？先っちょだけ！先っちょだけだから！」
「あ、あああれは何かの間違いだっての！ってか『先っちょ』って何だよ!? クッソ！縛られてるからって調子に乗りやがって……」
「あん？別に縛られてなくても力ずくで従わせても良いんだぜ。とりあえず腕の一本二本、軽くいっとく？それとも爪剥がされる方が良いか？」
「そ、それも止めて……。あーもう!! エイミア!! フーバー!! 誰か！誰か俺の貞操を守ってー!!」
大きなマットレスの上に放り出された若い男は全身をワイヤーでがんじがらめに縛られながら悲鳴を上げた。
運転席にいるフーバーはいざ知らず、エイミアは聞こえているだろうがジグに仲裁を頼んだことから助ける気はさらさらないことが窺える。
要するに、エイミアもガンブの性癖について何となく察しがついたのだろう。それを理解した上で二人っきりで放置しようとするとは中々の鬼畜である。
だが、正直ジグにとってもどうでも良い状況なのは変わらなかった。
「ガンブ、あんまりノンケを脅かすな。これ以上暴れられたら車体ごと横転しちまうぞ」
「お、ジグ！良い所に来てくれた！この馬鹿竜の体を押さえといてくれ！その間に俺がヴァザックくんの童貞ノンケで清らかな体を頂くから」
「おい馬鹿止めろぉっ!! たっ、助けておじさん!! この変態マジ怖いんだよ!! こっ、このままじゃ俺掘られて滅茶苦茶にされちまうっ!!」